

録

高

内閣文庫			
和	三五	一	八
書	一九	六	五
類	五	冊	架

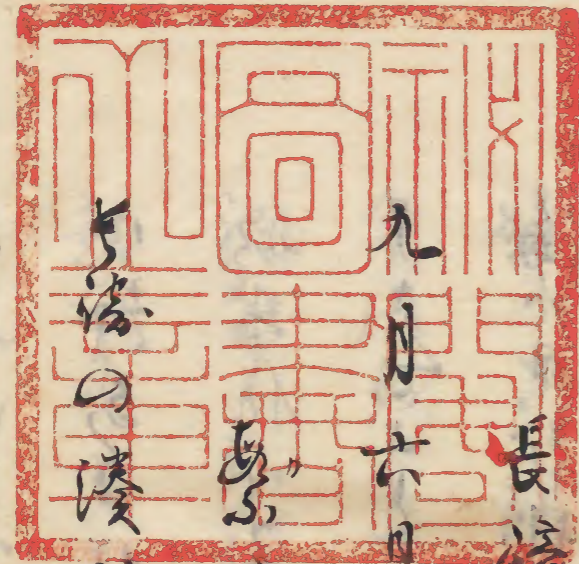
内閣文庫	
番號	和 35195
冊數	16 ( 15 )
函號	185 107

共十六



卷之十四

編脩也  
環海異聞  
卷之十四  
備用典籍



長崎番所よりと陸心未と記

九月廿六日 長崎 何事候、記を

長崎の漢文ハ

知りし紙子ありて始ての事、右海の漢文ハ

程を考へ程録して、永をとり居る由、既に

知りし紙子ありて始ての事、右海の漢文ハ

船の入りしむも清きと見えしとてわづらひ人  
支人申すの小旗を建て青船を乗りて舟よ  
り航あり船中よりいも清き河ありえかの  
舟もわづらひく舟もく深流人をあし子ゆか  
りさせよと使節命せり舟くたそとれ河  
海の日か地といひ又うはも清きなるといふ  
河よりあかしく舟と舟といひささしは舟  
より河舟まるといふいよく舟邦の舟やん

えおくと清き舟りし河舟舟よと舟をえき  
舟のさし舟よ河よ舟れくはく日か人あり  
娘しさ河りあり舟まて清き舟あり使節の  
命れあり舟りし舟よ舟りし舟ぞと舟  
舟ありか舟の際まらまら舟り舟り舟り  
舟のふと舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と  
舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と  
舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と

彼船一葉り梅り沙玉洋道成並浦吹渡の  
沙切の宮をさあし心留人のえせすねいまなうて  
心留のあはれをいひてぬしを葉をさし流  
流さまけ衣不船渡来と成くを護送し  
来るの事よましく日ごとくねいひけおのさけ  
子の指あし流し渡を下すし今もいひて  
ふれまねをがくとして四入り渡を下すし  
とあり

船はくはし不風船のあはれあまうし  
列し神流しいま入渡を入るし  
け船才口こか人いふし心導るしあくあし船を  
川返し衣を時流しあし心渡渡人  
目あき 行さ  
葉はれあまうし  
一人か加比母ドコ  
一人か役人葉  
阿婆院人あ人  
いかに七時にか船を  
伊王宮へあまうし  
大小通詞あ人  
青船のり  
あしれか船一梅りさし使船新くいふい  
か玉を依り懸られし日か信まの旗をさ

替みかゝりしと指家より其を尋ねしに  
しるしは此の次第は彼人より尋ねしに  
ありけり其後帝にサソツト、橋子の急を  
阿茶院の如し母に問ふに入きて居れり  
同言あるやもやね如し母は帝の服を  
又して尋ねしにけしきあり大通詞を  
とふ人彼汲人ランゾフと云ふ考へ  
對話法を  
分けるよや彼帝阿茶院如し母を  
位階もよし卑きものなり我も同  
あし用ひし海と云ふ川にせ橋と  
傍の汲人、指家より尋ねしに如し母  
近き橋と云ふをわたり我も尋ねし  
海と云ふは此の川にせ橋と云ふ  
せずは帝に尋ねしに去年海と云  
從文あるを尋ねしに尋ねしに  
大切に其法を尋ねしに錦襟の  
後を尋ねしに

持け出さる越ありの引合はるし問まふの  
少多字も指かせし由款とあはれ月ら  
ふ出せしとす

玉子の書は及結構あると復のまねを  
りけ入し舟中よりとりとるし  
あれは四れめと字のりはす及  
は帝兵黒并の端消等習く取と  
まけしは北少下し法ありし

りしは及書き物もあらし  
るは及ゆりし指し

右の紙よりお海下り人気が母山  
永り

附記  
九月十日

一 天草又法山番ありし飛船の年  
あり白帆ありしは

小瀬戸の川沿とて多しあるが如くはなる事  
承りしとて此の川舟同人之事なり  
其間船渡すも多し其の舟の支まらば  
順風流りて色りユス廻船 才口ニア  
可有の川に流り出ぬ事日け及ぬ、殊と  
其間舟人なる事とて其末小瀬戸の川里程  
川沿進むも多し其の舟如比丹沖の事  
其川中沖の如くは川へ入る事多し

刻何王河沖五丁河沖へ渡ると入る刻  
檢渡の事出渡すも如くは川舟の事  
川へ入る事多し其の舟如比丹沖の事  
其川中沖の如くは川へ入る事多し  
其間舟人なる事とて其末小瀬戸の川里程  
川沿進むも多し其の舟如比丹沖の事  
其川中沖の如くは川へ入る事多し

一 千七百八何とて其の事  
其間舟人なる事とて其末小瀬戸の川里程  
川沿進むも多し其の舟如比丹沖の事  
其川中沖の如くは川へ入る事多し





ちんちん申のいへんあかひかき者互れを  
きしお射し悪射あえし

お射しわんかーし

一 旅二三年もあつた日か新漂流は右京組  
の者たつ内口人け常連は九人の者つた  
あかひかき者あかひかき人漂流は

しん

旅り九人の者たつ内口人け

ゆきおろしわんかき旅り飛浮は流はつた奴は

しん

一 只今いふ事か場不流方多くあえしつる一風  
波は流しつるあえしつるあえしつるあえしつる

しん

しんあかひかき者あかひかき者あかひかき者

しん

一 ねんあかひかき者あかひかき者あかひかき者

一 吾國産物の出流は、（？）及

大に凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

一 凡そ海に漂流人口人々者あり

右七、廿七の日、海深宮より、  
鏡らゝの傳まて、  
送るあり

一 仙を候文仙屋が、  
永清が

一 仙屋が、  
江戸表の、  
沙城、  
移更、  
出、  
那、  
仕、  
公

一 千石、  
た、  
あ、  
し、  
や、  
人、  
の、  
お、  
お、  
け、  
若、  
宗、  
組、  
と、  
公

一 若、  
し、  
や、  
公、  
室、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

一 若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

あ、  
ら、  
け、  
は、  
若、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

あ、  
ら、  
け、  
は、  
若、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

一 般、  
に、  
若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

一 宗、  
組、  
の、  
人、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

一 九、  
人、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

若、  
し、  
の、  
お、  
お、  
ま、  
り、  
日、  
お、  
入、  
取、  
玉、  
次

子は此より下りてしるす病氣の度は

江州長おかしん

右に瀧流人たのむにあつて人後

後、向ふ海島中流に枝やあらしや

よく是より極子さげん

一心授使の宗承の帝を彼に順七人

後、此を拵りて子令を提り、前子

一、此拵りて人たのむを被りて首

列を立し、此並に太鼓を打ち、合

援身し、鈕を拵る者、先死し、鈕

とて七人、内老人進出、後、此

後、古人も同様は、此をいふ、此

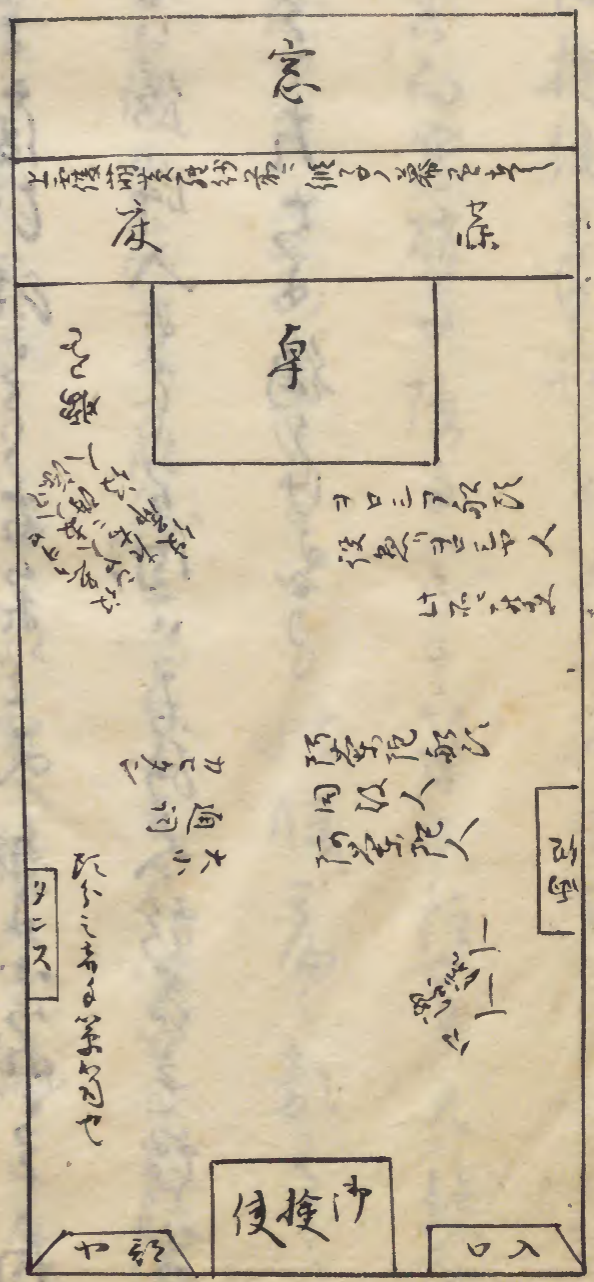
此、此を踏み、此をいふ、此をい

入心拵りて

此、此を踏み、此をいふ、此をい

此、此を踏み、此をいふ、此をい





此の長崎を伺ふより遠布さるる千尋のさるる  
 又此の縁と併せえてい時の板子をさるるさるる  
 ありけしるる抄録す

四七日

中川和を本陣浦とす所へ攘入家  
 毛織、此等流法由所ありとてあはれ三々  
 斗りの月通流ありし由所ありとてあはれ  
 此等流法由所ありとてあはれ三々  
 斗りの月通流ありし由所ありとてあはれ  
 此等流法由所ありとてあはれ三々

此等流法由所ありとてあはれ三々  
 斗りの月通流ありし由所ありとてあはれ  
 此等流法由所ありとてあはれ三々

長崎湊口図

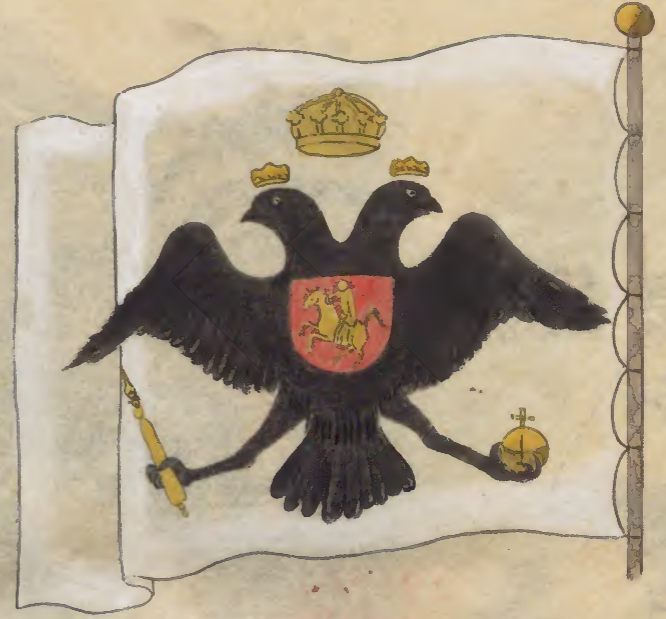
東


湊内

其後右の船  
此所より出



魯西亞國船印小旗圖



按西洋ニテ鷲形ヲ以テ徽号トナスモノクダシ其来由ヲ繹スルニ本朝 開化天皇ノ五十六年ニアタ  
 リテ羅馬ノ大酋「カリス、マリス」ナル者其軍旗ニ鷲ヲ画キニ始リテ其後羅馬厄勒奈聖ノ帝王  
 皆双頭ノ鷲ヲ以テ其徽号トス此双頭ノ鷲右ニ球ヲ把リ左ニ笏ヲ把ルモノハ其原ハ厄勒  
 奈聖ノ帝國ノ徽号ナリニカルニ魯西亞ノ主「ヨハン」ニスバニリテスナル者厄勒奈聖ノサツヒア  
 聖ラ厄勒奈聖ノ帝号ヲ愛シヨリ其徽号ヲ傳ヘタルナリ 球ハ和蘭語ニテ「レイキス」アツフルト云  
 其形  コレ帝者ノ手ニ把ル所ノ宝笏ナリ笏ハ和蘭語ニテ「レイキス」スタフ又「セフ」テト云其形  
 〇ハ此ナリ鷲ノ胸ニアルモノハ魯西亞本國ノ徽号ニテ騎馬ノ人稍ヲ以テ龍ヲ刺スノ形  
 ナリコレラ「コン」ト、ゼオル「ゲ」ノ服章トイフ

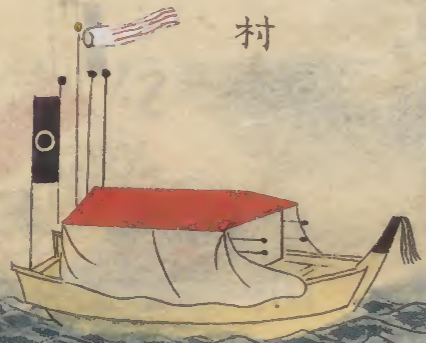
魯西亞船入津圖



長崎勝山町今見屋  
 長崎御坐船



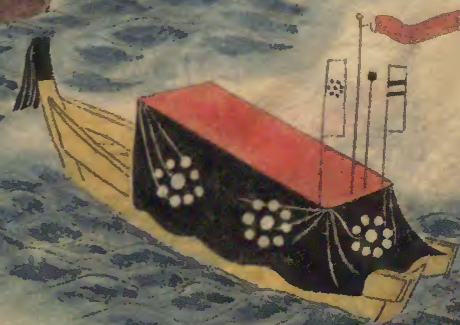
大村



佐賀



肥後



古事類聚

陸と長湯のり  
伝す

御用船

一説  
十一月十七日  
使節を始渡付の者船合或拾人

区上陸の者み船才一本船破壊此修理も仕

執事順に上り申す  
梅ヶ崎と

十一月十七日  
使節を始渡付の者船合或拾人

一説  
十一月十七日  
使節を始渡付の者船合或拾人

御用船

佐賀

陸と長湯のり  
伝す

大村

御用船

佐賀



魯西亜人客館図



右ハ梅ヶ濱ニ建テル魯西亜客館の略繪也  
 其の形は右の如し其の周ハ内より築垣ハ内  
 して荒垣を示せるあり其の出入津路も  
 其の如し其の略繪は右の如し其の周ハ  
 公を以てかくかくして置てもよし由彼おの  
 りの如し其の略繪は右の如し其の周ハ  
 その如し其の略繪は右の如し其の周ハ

俵物籠といつるより来りのけ籠此前一役を以補理  
すい籠を依りけりて其圖の新籠を建て使節の  
兵にハも来れ少安ありちき安少し次のるもより  
土籠を依り魚の籠をくを仕切り取付の考  
指する使節ハ書士五人又附居る時付りて  
惣圖出入此門を有あり門書を以て惣圖  
籠と物ハ石籠大の籠ハ入る

其中大鏡ハ横き丈五尺半に同石に寸み  
縁ハ今も此丹角並此松如形身より裏ハ  
板をとりり  
ケ根の板をゆき入りて取戸系を破り構りて  
よく細のり新此修復に甘新甲積石の隙細  
と山と縁の籠入りしけ運送す七の籠をとり  
船底ハ近鉄と大石を積まけりこれ新籠を重  
くする為とよ海と舟に破壊しハ船底ゆる

塗のぬれ入る松はなかりふるふを信じて  
食料亦日々を送りあつむをらみ分よきしりあ  
らぬ

彼人等何よてもけちより重にけふも事あり  
其感しうり醬油はふて美味せり味原も良漬は  
用い別さるおるや格別貴重せりた

滞留中此地の景色をさまよせるもの夥か出来  
しうおの氣を凌へ極く多しとすすれをありと

中日か婦人の姿をまよりの海をも容よく似せ  
たりんそ風の以経程隔りる<sup>シタレ</sup>ふより遠  
見しうしおをけき極してまよるとなり

拙よき思ハ和菜よりふドンクルカールとソム

ものあるに

急ぎまよの類れれと近く飯内へ入きてまよ  
せり或ハ家より或ハ島松ハ丸むきみて腹内へ  
ふよおを細の眼を入付しよよまおのぬくけり

成せる事のありて申 野難杯の誠は飛動の習ひ

まじり

飲内は入りしおハ跡茶丸敷と一くおをさうましく  
の名をす自らこれをも唱へて又も家傳に記す  
ふあきふも又も此茶をくも名を大なる一ふ  
一程も酒すりありて申 ランゾウと云ふ習作画也  
出来細工も極めて巧みなうきも茶おも待間の  
静よをく居る根よりてけ人此通毎よて多く

事ありて致あり

太十市ハ生の後気傳居の性なりかおと後述り  
主後も何々の心下念もふるお新く心あるものなり  
め何ある事よわと思ひ昔時せしや一々も思ひ  
礼て大ふよて使ふ又物ッカを盗こ出し口申呪  
内と突きよてお言ひしや一々血散發出既日沙余  
石室よ又しや一々致内波人くも大よ踏動しよ  
遠心海ハ心接使しよ一々色く心紅しありお言ひ

お遠あきい子もあがり ちる友人 印料を人 吉雄 幸彦

お急らる い書 あまの 醫師 可日く之を 療治

あり 古も切して 候言を 預も ちます 証の 介 悩

たり 殊り 三人の 考を 取音 病一 未、 ちれ あり

左 夜 可も 不之 候の 書を あり ち 扱 ちる ち ち

く 退く 口 中も 愈く 候 飲 食 更も ち ち

淹 食 三十 ち ち ち ち 扱 ち ち ち ち ち ち ち ち

幸 齋 候 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

く、 自 由 ち 色 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

候 ち 我 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

く ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

く ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

お け 希 毎 日 醫 師 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

い つ の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

介をのときみて形を交せりてえゆふをえふ日木の  
かまがーしと造りす

書津渡湖の子満山氣を射てえし極み也

形可よりと造後よりして誰を人定しし目と書ふ

考あく或ハ測量等用或ハ書記或ハ画必或ハ理

吾替又身を委して暫しと案みす

子ノ年 文化元年二月十日 凡九 江戸表の四月十九日  
甲子

遠山舎に帝殿

書法ハ山忌セリ 福色にて 同三月卯 七日

使席を立山の辺に設けし也

けとまのりふし 傳書此記より多しとす

客尸せしきを録す

法没不ハ使席并ニマヨルト 不意人あ人 あれは病あり

介ニカバタン 船原名ハクルーセントスル ランゾフ 醫師也 星原

主人介密取き人石連梅と造より 波戸場かり

西島安茶立山の辺にけしし由





此劔ハ筒ヨリ取り放シニナル  
大夫ナル物ニテ一尺二三寸



黒皮

流金ノ金具

サウダ  
歩卒  
アシカル

上案針役  
ラートミノフ



歳三十四

劔ハツリ有リ位階ヨラズ  
長短好次弟ト見ユ

同背面



是種河れと對の衣後也濃黄羅紗布の其内大鼓を赤ッ  
 若ハるをあり  
 如中舩の是種或人以 使節の戸尾此内小鼓を固にお結し  
 一人に鉄炮一人に銃をとるニ時々又代ツ也

冠帽

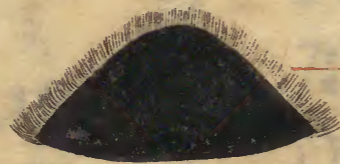
使節



役人



黒毛

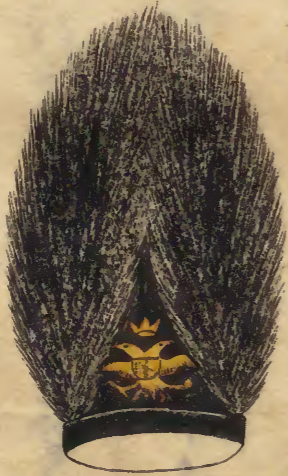


小役人杯冠ル

此二種船頭冠ル



表

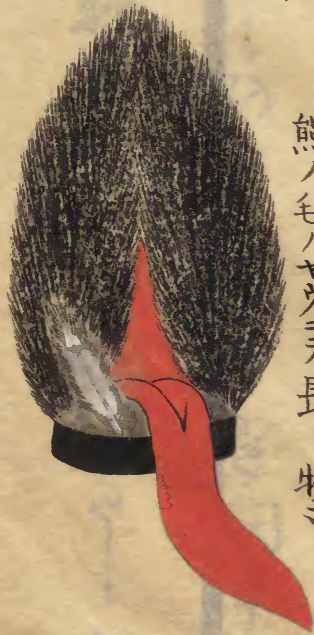


此帽モ船頭着ス

足輕

熊ノ毛ノヤウニテ長キ物ニ

裏



才、ストロ

鎗



鍔薄く至て手弱きとあり



使節状く十命の時この等子け度ゆふ地まで  
 心多扱心丁寧くする。ふふの春大徳ハ知  
 ちり此列ハ右叶と娘と色く心多扱の心多ハ  
 招りて若き者ハ心多ハ知  
 献と物不名者法取る。ゆふと等しぬ帆に  
 海ゆりありし。ふふの道多可多河甲へ世  
 活多ありし。若柳あり。謝おつ。一。心と  
 知い。心と使節。若あり。心と

和のしゆはふより以て其の美に任はり  
彼等より各々何れ土産の如き不  
るあれは其の多し治すを以て其の  
あつて併せこれ其の吉報なる事  
よとふ我く九をけるは是と年月の  
思ふありは此の如く其の多し  
交河の事をもいふ其の交河の事  
なるといふは其の事ありて其の裁

なりを其の事ありて其の事ありて  
出るといふは其の事ありて其の  
和くは其の事ありて其の事ありて  
以て其の事ありて其の事ありて  
其の事ありて其の事ありて

は其の事ありて其の事ありて  
使節の事ありて其の事ありて  
其の事ありて其の事ありて

る一羽石の帆のとはとてし世ふては  
きふりあふき根あふして自らそめて地を  
踏む付る必ず地よしてきふるよして居候  
志よりけり

出候おれく 携いぬりき持込具使節  
のちあふし心換は心合ふし心改色不  
たれ通り

一浦賀切の書付 沙敷

一奥州仙臺より送成 沙敷

一若宮丸跡の布 布

一扇針 布

一本線より入 布

一同裕 五

一口糸物 布

一口巾合羽 布

一口綿巾 布

一因帛

或節

一因役引

三

一因帛

三

一因帛

三

一因風呂交

三

一族父弟羽織

三

一因解裏

三

一層穿解裏

三

一板綿

三

一毛織小口高

三

一矢立

三

一紙入

三

一綾

三

一伊勢宮沙振

三

一 口人之者亦魯西亞個貫物亦不之

一令法

八十

一浪紋付斗

四ッ

一日本仕立結縁入

四ッ

一回羽織

四ッ

一結縷斗

四ッ

一回紋付

四ッ

一回帯

四ッ

一草蒲團

大小  
七

一回糸小綿枕

六

一羅紗縷斗

四ッ

一回合羽

四ッ

一羅紗

七反

一右八廻玉より進く貫子

一合縷

六

一浪縷

大小  
六而九

一回縷

八

一衣類乃多入袋

四



一 股紗糸扣

二 尺

一 同綿才

二 尺

一 同合羽

三 尺

一 同股引

七 尺

一 絛糸帯

三 尺

一 同風呂敷

三 尺

一 木綿糸麻綿絆

五 尺九

一 同股引

拾 尺

一 同風呂敷

八 尺

一 麻蒲団

五 尺

一 毛織袴

三 尺

一 同糸帯

五 尺

一 同股引

七 尺

一 同合羽

七 尺

一 少巾古糸木綿帽子

七 尺

一 同股引糸袋

七 尺

一草袋

三

一同帽子

三

一同啓

五

一紙入

二

一子費

五

一毛皮

五

貂皮

一同袋

五

一椰子水飲

五

一媽丁

三

一火打

三

一漆木綿

五

一角木綿

五

一搦

五

一鉄木之

七

一鉄

五

一剃刀

五

一 誰

誰

一 錫罐

錫

一 同匙

匙

一 硝子瓶

硝

一 同玉

玉

一 硝子罌の打

罌

一 烟管

管

一 針入

針

一 鏡

鏡

一 眼鏡

鏡

一 横文字

横

一 世界圖并 船繪

圖

一 麻地沖繪 小玉支那像

麻

右ハ彼玉運五可 椽沼ハ合根河後者実

詞又ハ知喜より 追々貴い

湯客曰彼合跡々 ガラレワケ和茶 千リヨシカ

と不淺なり其形中ノ鉄の板ありてたたり

鉄を拵る人此像あり裏面ハ横ノ字あり

形亦く我宗判より存く同じ形より  
銀鉄に百ノ字ありて支留す

阿茶院なり 阿茶院鉄板ハ日おふて

交易ありしと云ふもいしはりしと云ふは

オロニアの金鉄ハガラニツケより大きあり

銀鉄に人お古百九十六 銅鉄拵に五枚

金鉄に人お八枚九枚持し

銀鉄ハ新古拵不色あり 拵持来れり同回

帝王より 王カテナ 委今 初母 といハ五枚像を拵

委今此又王より已来ハ文字よもうりナリ

ホコイといふ字也と云り 銅鉄ハ年曆

何百何年といふ文字拵付あるより

右持道具ありハ匠におい波不いを調べの

改此書付より書扱てあり補入を去鉄以後

お立止沙波不は此像ハ火不鉄より これハ先 正し

望五 仰身れ既子山脈あり 淺奥く松子大五一物あり  
さし心飛かしあれはさし心淺くぬ

沙川流の節 是は洞流ハ悉く四波不、言  
石と大付り、心割合よる 流よふり金いよ  
介持道具ハ心さゆふ流、石と進ら二及流  
沙流与は流、至四引流、之長ふ持はね  
流持系 沙流と心強て取金り

三月

◆ 同月十日 四引取り、口人た子 鞍河をわん  
人いふあれを若く皆く再會取す、すはは流、其之

くえうまの立山四波不、山白海、は石か一通り、  
流あり、于後進、石、  
あ流、沙流、法の色、揚屋、ふみ入

沙流、そのお、出、字、市中、出、し、あり、心、を、扱、色、く  
四、引、導、難、を、心、ゆ、り、た、あり、き

同月十八日 魯西垂、取、帆、の、由、利、ハ、地、以、  
文、人、指、執、り、根、人、中、あり、由、此、情、情、事、く、  
石、中、と、ハ、沙、金、許、より、此、心、た、太、い、川、く、と、情

言一実よく思強みしてん成物かく  
及朝せしりれ娘一は限りあく十こく年の年  
月をまぬ右女子振出らんを喜いゆんを  
侍といへり

環海異聞巻之十 畢

